

歴史授業と「なりきり日記（作文）」

——歴史授業において「歴史日記」を書くことの意義を探って——

松 永 康 史

“Narikiri Diary (Composition)” in History Class

—Exploring the Significance of Writing “History Diary” in History Class—

Yasushi MATSUNAGA

1 問題の所在

日記は歴史を知るための貴重な資料の一つと考えられてきた。教育方法の視点でとらえるならば、日記指導は、文章指導の教材として、また担任と子どもをつなぐ子ども理解の資料として捉えられてきた。一方、社会科の歴史授業において先人が書いた既存の日記を資料として読み解くことはあっても、生徒自身が時代の当時の人物になりきって日記を書き、みんなで読み合うという実践は稀であろう。

日本社会科教育学会から2016年に発行された『社会科教育の今を問い、未来を拓く』（東洋館出版社）において、小林朗の「原始人日記を書こう」⁽¹⁾という実践が紹介されている。ここでの日記は、「原始人日記」と銘打っているものの、原始人が書いたものではない。中学生が原始人になりきり、日記を書いているのである。（「原始人日記」以外にも小林の実践として、「江戸時代の農民日記」、「文明開化日記」があり、以下総称して「歴史日記」と表記することにする。）

2018年2月、小林の授業を直接参観する機会を得た。そこでは、「文明開化日記」を書いたあとの日記を読み合う授業であった。実際に生徒が自分たちの書いた日記をもとに意欲的に話し合う授業を参観することができた。しかしながら、「歴史日記」を書くこと、読み合うことは、学習活動としてどのような意義をもつのか検討する必要があると感じられた。「歴史日記」を用いた授業の在り方を詳しく検討していくために、「歴史日記」の有効性を問い返すことは、生徒の歴史学習へのよりよい改善へとつながると考えられる。

まず、「歴史日記」を使った授業実践を考察するにあたり、生徒が一人で行う日記を書く活動と学級全体で書いた日記を読み合う活動の大きく2つに分けて考えてみたい。

- ① 「歴史日記」を書くことの意義
- ② 「歴史日記」を授業の中で読み合うことの意義

本稿では、小林実践における「歴史日記」を射程に入れつつも、「歴史日記」を書くことの

意義を考察するための前段階として、「歴史日記」と似た特徴をもつと考えられ、これまで実践されてきたであろう「なりきり日記(作文)」の特徴を整理する。また「歴史日記」に似たような実践が社会科の歴史授業においてこれまでにどのように行われてきたのかを整理する。そのうえで、「歴史日記」を書くことの意義を考察する足掛かりを得たい。

小林実践における「歴史日記」を用いた授業を分析・考察し、その意義や課題を明らかにすることは、今後の「歴史日記」を用いた社会科学学習指導への新たな手立てや可能性をひろげるものとなるのではないだろうか。

2 なりきり作文・なりきり日記とは

歴史を学び、人物になりきって書く日記を考察するのに欠かせないキーワードとして「なりきり」「日記(作文)」が挙げられよう。まずは、これまで国語科で作文指導の方法として用いられてきた「なりきり作文」の特徴と意義を考察する。

(1) なりきり作文とは何か

なりきり作文について、野口芳宏が次のように定義している。「自分以外のものに『なりきって』書く作文である」⁽²⁾。また、ねらいとして「まず、書くことを楽しむ、楽しみながら書く、ということである。」⁽³⁾と述べている。例として、サッカーボールやフランス人形、正男君のまくらを取り上げている。「なりきり作文」の特徴として、次のように述べている。

まず、ちょっと目先が変わっていて、おもしろい。子どもたちも「書いてみたい」と考える。「なりきり作文」はフィクションである。なにを書いてもかまわない。思い出したり、整理したり、調べたりしなくてもよい。また、好き勝手に書きまくっても一向にさしつかえない。取材、構想、叙述すべてにわたって、思いのまま書けるというところに、この作文の大きな魅力がある⁽⁴⁾。

また、「なりきり作文」に取り組んだところ、「単に作文力を育てるだけでなく、つまりは、自分自身を客観的に観察するという思いがけない副産物を生み出すことにもなった。形を変えた『反省』が、結果的になされることになった」⁽⁵⁾とその成果を分析している。川崎清は、「クリエイティブ・ライティング」(文芸創作)において、「『他者視点の内面化』がなされる時、同時に『自己視点の自覚化』もなされることである。」⁽⁶⁾と表現している。

また、山本悦子⁽⁷⁾によれば、『作文指導事典』(第一法規、1972)や『国語教育大辞典』(明治図書、1991)には、「なりきり作文」という用語は見られず、『国語教育総合事典』(朝倉書店、2011)の事項に記載されている比較的新しい作文の指導方法だという。

『国語教育総合事典』によれば、「物語文・小説を『書くこと』の指導」の中で「『視点を転じての想像力の養成』は、現代では『なりきり作文』という形で行われている」⁽⁸⁾と取り上げ

られている。川崎は、「クリエイティヴ・ライティング」(文芸創作)の指導の本質において、『『他者視点の内面化』という知的操作の過程は、母語の場合には、特に『書く』という能動的な言語活動を通して始めて自覚的に学習されるのである。』⁽⁹⁾と述べている。

自分以外のモノや人になりきって書く「なりきり作文」にどんな効果が期待できるのかについて山本は具体的に次の3点⁽¹⁰⁾を示している。

- ①なりきった「他者、事物」に思いを至らせ、そのものへの共感的理解を促すことができる。
- ②自分中心の視点から「他者・事物」の視点に移ることで、違った視点で物事を見たり、考えたりする体験ができる。
- ③他者・事物になって書くためには、想像力が必要となる。想像力の働きを促す効果がなりきり作文には期待できる。

山本の述べる効果は、「歴史日記」にも期待できるであろうか。

(2) なりきり日記とは何か

日記は、国語科の中で扱われることが多い。それは、日記が文章表現と密接に関わっているからであろう。『ひろがることば 小学国語 2上』(教育出版、2016年)に掲載されている三木卓作『えいっ』は、「書く」単元であり、「登場人物の様子を思いうかべながら読み、くまの子になったつもりで日記を書こう」を目標にしている。出来事と人物の気持ちを読み取った後に、日記を書くのである。「なりきり日記」という言葉は使用されていないが、「くまの子になったつもりで、その日にあったことを日記に書きましょう。(傍点は筆者による)」⁽¹¹⁾と記されており、「なりきり日記」と解釈することは可能であろう。また、一例として次のような文章が記載されている。

きょうは、とうさんと 町にいきました。とうさんは 「えいっ。」と言って、しんごうをかえたり、星を 出したりしました。とうさんは すごいなあと 思いました。

だけど、ぼくも えきで きっぷを かう とき、「えいっ。」って 言ったら、きっぷがかえました。……⁽¹²⁾

くまになりきり、出来事と気持ちが文章で表されている。日付は入っておらず、日記と呼ぶより作文と捉えることが妥当かもしれない。しかしながら、この教科書では、このあと、「つづけてみよう—日記—」のページが続き、生活日記を書くことにつなげていることが窺える。

森川正樹は、日記は生活を書くものと思い込んでいる子の、その概念を壊すものとして「バラエティー日記」⁽¹³⁾のお題一覧表を紹介している。その中に、「なりきり作文(何かになりきって書く)」があり、なりきり作文も、日記の一つとして捉えていることが分かる。また、「有名

人になりきって書く！（この人ならこう言う）」や「他人事日記（友だちや知り合いのことをその人になりきって書く）」も「バラエティー日記」の一つとして取り上げ、子どもが何か、もしくは何者かになったつもりで書くことを紹介している。

ここまでで確認しておきたいことは、国語科において「なりきり日記（作文）」を書く学習活動は、おおよそ小学生を対象にしていることである。

3 社会科歴史授業における「なりきり日記（作文）」

(1) 教科書にみられる「なりきり日記（作文）」

社会科の歴史授業において、「なりきり日記（作文）」を書くことはこれまで学習方法として扱われてきたのだろうか。問題の所在の章において、社会科の歴史授業で生徒自身が時代の当時の人物になりきって日記を書き、みんなで読み合うという実践は稀であろうということ述べた。そのことをまず確認しておきたい。社会科の教科書には、調べて分かったことや考えたことをまとめ表現する力をつけるためのまとめ方の種類や具体例が提示されている。その種類や具体例を整理することから、「なりきり」「なりきり日記（作文）」をキーワードとした学習方法が教科書上に提示されていないのかを確認する。中学校の教科書として、以下の8社の教科書（平成28年度版）を参考にした。

- ①教育出版 『中学社会 歴史 未来をひらく』
- ②東京書籍 『新編 新しい社会 歴史』
- ③日本文教出版 『中学社会 歴史的分野』
- ④帝国書院 『社会科 中学生の歴史 日本の歩みと世界の動き』
- ⑤清水書院 『中学 歴史 日本の歴史と世界』
- ⑥自由社 『新版 新しい歴史教科書』
- ⑦育鵬社 『[新編] 新しい日本の歴史』
- ⑧学び舎 『ともに学ぶ人間の歴史』

	教科書に提示されている まとめ方の種類	「なりきり」「なりきり（日記）作文」に関する活動
①教育出版	説明、図、歴史新聞、表、 キャッチフレーズ、ミニ レポート、仮想の討論会、 地図、年表、意見発表	<ul style="list-style-type: none"> ・中大兄皇子の政治では、聖徳太子の政治と比べて、どのような点で国づくりが進んだのかに注目して、ふき出しに人物のコメントを書き入れよう。歴史新聞の例として、関係者にインタビューして、国づくりでどんなことに力を入れ、何に苦勞したのかうかがいました。(52頁) ・かずやさんの班では、幕末に活躍した人物を個々に選び、それぞれの人物が理想と考えた日本の政治体制について語り合う、仮想の討論会を開きました。(徳川慶喜、坂本龍馬、民衆、岩倉具視) (154頁)

②東京書籍	年表、図、レポート、説明、比較表、プレゼンテーション・ソフト、ディスクッション、歴史新聞、提案	なし
③日本文教出版	表、整理、説明、話し合い、ワークシートまとめ、年表	なし
④帝国書院	レポート、新聞記事、手紙、図、地図、年表、写真、意見交換、テレビニュース、劇、イラスト、プレゼンテーション・ソフト、ホームページ作成、タイムカプセル	・近代（前半）で最も活躍したと思う人物はだれかを話し合い、その人物に手紙を書いてみましょう。(中略) ④作成した手紙をみんなと交換してみましょう。手紙をさし出された人物になったつもりで、質問に対する返答を考えてみましょう。(193頁)
⑤清水書院	図表、地図、年表、キャッチコピー、説明、表、まとめ、意見文	・まとめてみよう 鎌倉幕府はなぜほろんだのだろうか？ 御家人の立場から考えてみよう。(73頁)
⑥自由社	ノートまとめ、年表、人物カード、人物伝記、レポート、「ひとこと」作文、意見交換会、表	なし
⑦育鵬社	説明、ノート整理、意見文、意見交換、グラフの読み取り、歴史人物Q&Aカード、表、キャッチフレーズ、歴史新聞、ロールプレイ	・歴史人物Q&Aカードの例として、福沢諭吉さんへの質問「なぜ、『学問のすゝめ』を書いたのですか？」に対して、福沢諭吉さんになったつもりで答えをカードに書いている。(10頁)
⑧学び舎	人物カード、年表、スリーヒント・人物あてゲーム、表、発表、ポスター、意見文、意見交換、地図、説明	なし

8社の中学校用歴史教科書の、「教科書に提示されているまとめ方の種類」には、「なりきり日記（作文）」というものは見当たらなかった。しかしながら、教育出版の教科書では、歴史新聞の記事の中でインタビューのコーナーを紹介しており、インタビューに答えるためには、その人物になりきることが必要と考えられる。生徒が人物に「なりきり」答えることを提示している。また、仮想討論会でも人物に「なりきり」討論することを提示している。帝国書院の教科書では、手紙をさし出された人物に「なりきり」、質問に対する返答を考えることを提示している。清水書院では、御家人の立場から考えるということを提示しているが、これも生徒が御家人に「なりきり」考えることを意味していると捉えられる。育鵬社の教科書では、人物に「なりきり」質問に対する答えをカードに書くことを提示している。以上8社中4社が、生

徒がある人物に「なりきり」書く、話す活動を提示していることが明らかになった。しかしながら、これらの「なりきり」活動は「日記」という形をとっていない。「日記」という形にする「なりきり」活動は、他の活動とどんな違いをもたらすのか、この点は小林が行う「歴史日記」実践を分析する大きな視点となるだろう。

小学校用教科書はどうであろうか。小学校6年生の歴史を扱っている部分について中学校教科書同様、整理してみた。参考にした教科書は4社の教科書（平成27年度版）で以下のものである。

- ①光村図書 『社会 6』
- ②教育出版 『小学社会 6上』
- ③東京書籍 『新編 新しい社会 6上』
- ④日本文教出版 『小学社会 6年上』

	教科書に提示されているまとめ方の種類	「なりきり」「なりきり（日記）作文」に関する活動
①光村図書 (教科書の歴史分野だけを参照)	劇、歴史新聞、ちがいを比べる表、体験活動、人物年表、スピーチ、人物事典、年表	・大昔の人々の暮らしを劇にしよう。「今年の米は豊作だったな。収穫した米で、倉庫がいっぱいになりそうだ。」「そうだね。床を高くした倉庫に運んでおけば、ネズミに食べられる心配もない。」「それにしても、米作りが始まって、本当によかった。狩りは、どんなにがんばっても、えものの取れない日がある。米はこうしてたくわえておくことができるからね。」(28頁)
②教育出版	年表、表、歴史人物へのインタビュー、歴史新聞、関係図、絵の解説、キーワードを使った文章、人物解説、意見文、カード、資料を使った説明	・②歴史上の人物にインタビューをしてみました。それぞれ、だれにどんなことをたずねているのか、考えてみましょう。「中大兄皇子さん、あなたが（ ）氏をたおしたわけをきかせてください。」「（ ）さん、6度目の航海でようやく日本に着きましたね。どうしてそれほどまでして日本にこようと思ったのですか。」「（ ）さん、『この世をば わが世とぞ思う もち月の 欠けたることも なしと思えば』といううたは、どんな思いでよんだのですか。」 ・新聞づくりの例として「遣唐使新聞」が掲載されており、「人物について調べたことをインタビュー形式の記事にするのはどうかな。」と提案している。記事は「あの人は今～阿倍仲麻呂にインタビュー」、『唐に来て何年ですか』『遣唐使としてこちらに来てからそのまま滞在していますから、もう三〇年以上になります。』『どうして帰国しなかったのですか。』『唐の皇帝がわたしの能力を認めてくださって、帰国を許してくれないのです。今は、唐の政府の役人として働いています。』『日本に帰る予定はありますか。』『許しが出たら、すぐにでも帰りたいです。日本の風景や家族のことをいつも思い出しています。』(36頁)

		<ul style="list-style-type: none"> ・ 3人の武将に向けた、次のようなインタビューに、それぞれの人物の立場になって答えてみましょう。織田信長へのインタビュー「それまでとはちがう新しい考え方で、どんなことを行いましたか。」豊臣秀吉へのインタビュー「何のために検地や刀狩を行ったのですか。」徳川家康へのインタビュー「安定した政治を目指して、どんなことを行いましたか。」(63頁)
③東京書籍	<p>ノート整理、子どもになったつもりで説明、歴史新聞、カード、年表、4コマまんが(セリフ)、レポート、絵カード、歴史人物へのメッセージ、人物への報告の手紙、表、短文、キャッチフレーズづくり、関係図、なりきり作文、人物カード</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ ②米づくりが始まる前後のくらしや社会の変化について、縄文や弥生のむらの子どもになったつもりで説明しよう。(吹き出し)(24頁) ・ ①徳川家光になったつもりで、自分が行ったことを祖父の徳川家康あてに報告の手紙を書こう。②最後に、ほかの立場の人の意見を考えて、家光に伝えよう。家光が行ったことについて、ほかの立場の人の意見を考えて、ふき出しに書いてみよう。(外様大名、百姓、オランダの商人)(86頁) ・ 「明治の国づくりを進めた人々」という単元のまとめにおいて、②人物を選んで、新しい時代への思いや願いを書こう。(112頁)
④日本文教出版	<p>ノート整理、話し合い、年表、人物カード、ふりかえりシート、図、プレゼン、関係図、人物と選んだ理由、歴史新聞</p>	なし

小学校教科書では、中学校教科書同様、「教科書に提示されているまとめ方の種類」において「なりきり日記（作文）」というものは見当たらなかった。しかし、教育出版の教科書では、インタビューや新聞づくりの中で、人物に「なりきり」書く、話す活動が提示されている。教育出版の教科書は中学校教科書でも「なりきり」活動を取り上げており、小・中を貫く活動として取り上げているとも考えられる。光村図書では、当時の人々になる「なりきり」劇を提示している。東京書籍の教科書では、人物に「なりきり」、吹き出しに入る文章を考え、説明したり、思いや願いを書いたりすることを提示している。しかしながら、東京書籍の中学校用の教科書に「なりきり」活動は見当たらず、「なりきり」活動は、小学生に適している活動として捉えられているのかもしれない。小学校教科書において、4社中3社が「なりきり」活動を取り上げていることは、「なりきり」活動が小学生にとって適していると考えられている、とすることができるのではないだろうか。しかしながら、小学校教科書にも「なりきり日記」という「日記」を書くという活動はない。「なりきり」活動で「日記」を書くとはどういう意義があるのか、この点は小林の行う「歴史日記」実践を分析する中で明らかにしていかなければならない。

(2) 書籍にみられる「なりきり日記(作文)」

教科書には、「なりきり日記(作文)」とはっきり銘打つものは見当たらなかったが、書籍においてはどうかであろうか。有田和正・長谷川博文の書籍において、「なりきり日記」が紹介されている。「国語の授業で、見方を育てる一考え方は表現力と同時に一」という章の中で取り上げている。そこで、「なりきり日記」が社会科の指導の中で、6年生の歴史上の登場人物になり考えさせる場合を例に挙げ、「なりきり日記」が生きることを指摘している。これは、「その立場になって考える指導になるからである。また、視点の転換の指導になる。話して聞かせるだけで、子供達は簡単に書けるようになる。」⁽¹⁴⁾と述べている。この指摘は、2(1)で山本が「なりきり作文」の効果で述べた②の「違った視点で物事を見たり、考えたりする体験」がそのまま生かされていると言えよう。

また、『社会科教育』2012年7月号において、大恵信昭が「歴史人物なりきり作文」を紹介している。そこでは、「人物の最も光る場面や、人生の岐路に立たされたような場面を描写させたい」⁽¹⁵⁾と述べている。またセリフを入れることや場面を限定することで、子どもたちが調べる部分もある程度絞ることができるという。さらに、取り上げる人物として挙げているのが、信長、秀吉、家康の3武将や国難時の指導者に焦点を当てている。「なりきり作文」を書くことで、人物の決断、苦悩にも思いを馳せることができ、時代背景をつかむことができるとしている。人物の決断、苦悩に思いを馳せることができるという点は、2(1)山本が「なりきり作文」の効果で述べた①の「他者に思いを至らせ、共感的理解を促すこと」が歴史授業においてもそのまま生かされていると言えよう。

(3) 中学校実践記録にみる「なりきり作文」に関する実践

中学校実践として、関誠「荘園の授業」⁽¹⁶⁾の実践記録の中に、「なりきり作文」が見られる。その実践では、単元構想の③荘園をとらえる(4時間)の中で、2時間目に「荘園の住人になりきって、荘園の風景や生活の様子を描く」というテーマで作文を書かせている。続く3時間目には、小グループを構成し、作文を発表し合い、「良かった点」と「改善できる点」を出し合っている。さらに4時間目で、話し合いを踏まえて、「荘園の風景と住人の生活」というテーマで小論文を書かせている。「なりきり作文」、話し合いを経て書かれた小論文⁽¹⁷⁾は、内容が深まった(全体の87%)と分析されている。分析に当たっては、関自身が「荘園の景観」「住人の労働」「労働の甘苦」「住人の負担」「都と地方の関係」「授業者の想定を超える理解」という観点項目を設定した評価基準表をつくり、評価したという。

関は内容の深まりについて、「グループワークという手法が、それだけの効用をもたらすのであろうか。実は簡単にそうは言えない。今回のグループ構成は、生活班など機械的な構成ではなく、生徒個々の性格や人間関係をベースに『しゃべりやすい』であろうグループ構成を模索してみたのである。」⁽¹⁸⁾と述べ、グループワークという方法に効用があったのか、グループづくりの考え方に効用があったのか断定できないとしている。いずれにしる、関はグループワークに着目して内容の深まりを考察している。「なりきり」で書いたという学習方法の考察は、

全く述べられていないのである。「なりきり」を使わずに、「荘園の風景や生活の様子を説明しなさい」という課題であった場合はどういう結果になったのであろうか。その点における考察が、「なりきり日記（作文）」を書くことの意義を考察する重大な視点であることを確認しておく。

(4) 小学校実践記録にみる「なりきり」に関する実践

小学校実践では、西本匡志「話し合い活動を通して、子どもたちが生き生きと活動する歴史学習—『なりきり歴史学習カード』を活用した実践から—」⁽¹⁹⁾という6年生を対象に実践した教育論文がある。西本は、「暗記に偏重しがちな歴史学習を『もしも自分だったら。』という感覚を大切に、自分の考えを明確にさせながら、意欲的に歴史の学習に取り組ませたいと考え」⁽²⁰⁾、3つの手立てで実践している。3つの手立ては、「なりきり歴史カード」の活用、「なりきり歴史劇」の活用、「なりきり歴史新聞」の活用であった。

「なりきり歴史カード」を活用した実践では、カードを使って役割分担し、鎌倉時代の地方武士団、北条政子や北条義時、後鳥羽上皇や藤原秀康、順徳上皇、朝廷の使者、土御門上皇になりきらせ、鎌倉方に味方するのか、朝廷に味方するのかを話し合っている。江戸時代には、農民、武士、町人になりきり、身分制度について学習し、江戸時代の人々の生活を理解したことを報告している。また、奈良時代にも「なりきり歴史カード」を使って学習しているが、詳しい内容については触れられていない。

「なりきり歴史劇」を活用した実践では、平安時代の発展的な学習として、坂上田村麻呂を主人公に歴史劇を行い、「大和朝廷が勢力を広げていく様子と、それに対抗した人々がいたことを、驚きをもって体感することができた。(中略)劇を行ったことで貴族の政治以外の部分で、平安時代の多面的な理解が深まった」⁽²¹⁾と述べている。また、江戸時代には、大政奉還に向けた雄藩の動きを、西郷隆盛など児童に認知度が高い人物を取り上げ、劇を行っている。両時代とも劇の後に討論や話し合い活動も行っている。

「なりきり歴史新聞」では、飛鳥時代「飛鳥時代に活躍したのはだれだ?」、安土桃山時代「わたしの好きな戦国武将はこの人です!」、明治時代「お札の肖像画にふさわしいのはだれ?」というテーマで、作成している。明治時代の実践では、なりきり歴史新聞を作り「自分こそが次期肖像画にふさわしい。」という話し合い活動を行っている。

活動の検証について、「なりきり歴史カード」を使った学習について、「児童は意欲をもって主体的に課題を発見し、問題解決の力をつけることができた」⁽²²⁾と述べている。「なりきり劇」の活用については、「さまざまな角度から歴史事象を眺め、各時代の理解を深めさせるのに有効であった」⁽²³⁾と述べている。「なりきり歴史新聞」の作成においては、発表が苦手な児童がさまざまな資料を活用して作った歴史新聞で、自信をもって発表したことや友達の発表からさらなる関心が生まれている様子だったことを述べている。「なりきり」活動が、小学生にとって有効に働いたということであろう。

ここで、面白いアンケート結果が紹介されている。西本が、歴史学習が終わる間際にとった

アンケート結果によれば、「なりきり歴史学習カードを使った学習を中学校でもやりたいですか。」という質問に、やりたい34人（89%）、やりたくない1人（3%）、どちらとも言えない3人（8%）であったという。学級の中のおよそ9割の児童が「なりきり歴史学習カードを使った学習」をしたいと答えているのである。児童が歴史上のある人物に「なりきり」活動することを、中学生になってからの学習でも期待していると言えるのではないだろうか。そうであるならば、中学校においても「なりきり」活動は、主体的に生徒が取り組むことのできる活動として有効であろう。小林が行う「歴史日記」実践も、ある人物に「なりきり」行う活動であるから、主体的に取り組む姿が見られたのも頷けることである。しかし、なぜ「日記」なのか。この点が、改めて強調されるのである。

4 なぜ「歴史日記」なのかを探って

小林はこれまで「〇〇日記」を書こうという実践を行っている。小林は、作文とは言っていないし、他の「なりきり活動」（歴史新聞やインタビューなど）とも違う活動を選んでいる。なぜ、日記なのだろうか。川崎が述べたように、『他者視点の内面化』は、特に『書く』という能動的な言語活動を通してはじめて自覚的に学習されるからという理由だけであろうか。他の視点があるのだろうか。このことを探るために、一般的な日記を定義づける視点から、小林実践における「歴史日記」を概観しておきたい。

(1) 一般的な日記と小林実践における「歴史日記」

アンディ・アラシェフスカは、日記は「定期的、個人的、同時代的な記録文章と定義できる」⁽²⁴⁾としている。少し長いが、詳しく引用する。

- ・「定期性」 日記をつけることは、日付の入った記事を定期的に作成することである。その一連の記事の異なったものが日記である。記事は、毎日のように固定した時間感覚で書かれるか、あるいは特定の出来事に結びついている。
- ・「個人性」 記事は特定個人によって作成される。その人が日記を書いているあいだアクセスは制限される。ただし他者に日記へのアクセスを作者が許可する場合もある。また、日記が破棄されないままであることは、誰かに日記が読まれることを暗黙に認めている可能性がある。
- ・「同時代性」 記事は、出来事や活動の発生直後か、それにきわめて近い時点で作成されるため、回想に起因する問題で記録が歪められることは最小限にとどまる。
- ・「記録物」 記事は、ある人物が、重要であり関連があると考えていることを記録しており、出来事や行動、相互作用、感想、感情を含んでいる。通常、記録は時間に沿って書かれた文章の形をとるが、技術的發展とともに音声記録やビデオ記録の形を取ることも可能になっている。⁽²⁵⁾

日記を定義づける4つの視点を軸に、小林実践における「歴史日記」を見てみることにしよう。1つ目の「定期性」については、日付の入った記事を定期的に作成することであるという。ところが小林の「歴史日記」には日付を必ず書くということをしていない（書いている生徒もいる）。「歴史日記」は、一人の生徒が単元の中で一度しか書いていないため「定期制」があると言えない。しかし、多くの単元で書いていけば、「定期性」があると言えないわけではない。ところが、「なりきり」であるため、別の単元で書く日記は、なりきった人物が変わり、2つ目の「個人性」も含め当てはまらないと言った方が妥当であろう。3つ目の「同時代性」は、出来事や活動の発生直後か、それに近い時点で書かれないといけないが、歴史を遡り書くわけだから、ここもアラシェフスカが述べる日記の定義とは正確に言えなくなる。4つ目の「記録物」については、出来事や行動、相互作用、感情、感想を含んでいるというわけだから、この条件はクリアできると考えられる。以上のことから、小林の「歴史日記」を日記と呼べないのではないかということは指摘できようが、そのことよりもむしろ定義から顧みれば、「歴史日記」のさらなる可能性が考えられるのである。

(2) 「歴史日記」の可能性と小林が実践する「歴史日記」の特徴

まずは、「定期性」の観点で、必要に応じて日付と天気を記入するということである。何年何月ごろの話なのか、天気によって左右されることなのかを視野に入れることは、当時の時代背景をより具体的な姿として想像させはしないだろうか。次に、ある事件や制度の変化の前で「歴史日記」を書くことで、生活の何が変わったのかをあぶりだす契機になりはしないだろうか。このことにより、2回ではあるが「定期制」「個人性」も保証できるとは言えないだろうか。なりきった日記の書き手は誰なのか（なりきった人物は、どういう人物なのか）といった「個人性」をもう少しはっきりさせることで、その後の読み合いが深まる契機になりはしないだろうか。

小林における「歴史日記」の実践は、生徒の歴史認識を深める手立てとしての広がり可能性を秘めており、さらなる発展を期待できるものではないだろうか。

「歴史日記」の可能性について述べたが、一方、小林が実践する「歴史日記」は、小林の生徒理解と小林と生徒の関係性を含めた固有性があると考えている。

1つ目は、小林が「歴史日記」を書かせる際、歴史上の著名な人物を書き手として取り上げない点である。一原始人、江戸時代は一農民、文明開花では民衆、新潟一市民を日記の書き手としているのである。そこには、一民衆として生きた人々を通して時代を見つめ、一市民として生きる生徒への道標としてほしいという小林の思いが込められているように思われる。では、著名な人物を取り扱わずとも、人物の決断や苦悩に思いを馳せることもできるのであろうか。もちろん、指導者ではなくとも時代に翻弄されながら、決断や苦悩する当時の人々の姿があったはずである。そのことに思いを馳せることは可能であり、時代背景をつかむこともできるのであろう。

2つ目は、小林自身が、生徒の書いた日記には、生徒自身の生活や生活認識がにじみ出すこ

とを自覚している点である。小林は、生徒が今の自分の生活を無意識の中に「歴史日記」中に表出している点⁽²⁶⁾を見逃してはいないのである。その点でいえば、小林実践における「歴史日記」は生徒の無意識レベルにおいて、ある人物になりきってはいない失敗としての「なりきり」活動と言えるのかもしれない。しかし、そこに中学生という一生徒が、あたかもだれかになりきったこととし表出する「歴史日記」は、実は、生徒自身の生活や時代に対するリアリティの裏返しとして表出させる活動なのかもしれない。「なりきり」という活動を行っていることを前面に打ち出すため、生徒は、「自分のことを語る」ことから距離をおいて活動できる。あくまでなりきった人物ということである。小林は、生徒が書いた日記を匿名にして全員にパソコンで打ち直して配布する。日記の書き手はおおよそ分からない、分かったとしてもそれは、なりきった人物のことだということに生徒に安心感を与えている。「日記」は生活のことを振り返り書く、その手軽さ、そして小学校時代にやってきているということから、高くないハードルとして取り組めることもその良さであろう。さらに小林は、日記の中でうけねらいで書いた生徒の作品も拒否せず、受け止めることを大切にしている点⁽²⁷⁾も確認しておきたい。

これらの点を踏まえ、小林の授業分析を今後丁寧に行い、「歴史日記」の意義と可能性を明らかにしていきたい。

5 おわりに

国語科で行われてきた「なりきり日記（作文）」を手掛かりに、社会科歴史授業での方法として用いることを検討してきた。2(1)で山本の述べた3点の意義を、社会科歴史授業という視点で振り返ることで本稿をとじたい。①については、歴史授業においても、当時の人物になりきり当時の生活を文章に書くことは、まさしくその時代を生きた他者に思いを至らせ、共感的理解を促すことにつながるであろう。②については、歴史授業においても、現代社会を生きる生徒が、過去の社会事象を捉えるとき、今の自分として捉える視点から、その時代に生きた人として捉える視点への変化は、違った視点で社会を見たり考えたりすることにつながるであろう（ただし、小林実践における「歴史日記」は、完全な視点の変化をしない、無意識的にこの今の自分の視点を大事にしている）。③については、作文指導において、想像力の働きを促す効果を期待しているが、社会科歴史授業の「歴史日記」においては、想像だけでは書けない。調べ学習等で得た知識が必要となる。何の知識もないところに想像するのは困難である。この点は、一般的な「なりきり作文」との違いであろう。

社会科歴史授業において「歴史日記」を書く意義は、上述する点においても生徒にとって歴史認識を深めるのに有効な活動と想像できる。しかしながら、どの单元でも、どんな生徒にも「歴史日記」を書き、話し合うことが有効かと問われれば、検討する必要があるだろう。中学生にしては稀だと思われる小林の「歴史日記」実践において、小林の担当する生徒がなぜ意欲的に書き、話し合いを展開するのか、小林実践の授業記録などからさらに丹念に分析、考察していく必要があるだろう。

注

- (1) 小林朗「ネット社会のなかで孤立する中学生に歴史の楽しさを実感させる授業を一実践「原始人日記を書こう」一」、日本社会科教育学会編『社会科教育の今を問い、未来を拓く』東洋館出版、2016年、14頁～27頁。
- (2) 野口芳宏『鍛える国語教室シリーズ13 作文力を伸ばす、鍛える』明治図書、2005年（初出：『作文で鍛える（上）』明治図書、1988年）、88頁。
- (3) 同書、92頁。
- (4) 同書、89頁。
- (5) 同書、93頁。発展として「なりきり作文」への返事を書かせている。
- (6) 川崎清「初年次教育における『作文の技術』の指導原理（その2）『クリエイティブ・ライティング』（文芸創作）の指導を中心に」、文京学院大学総合研究所『経営論集』第26巻第1号、2016年、96頁。
- (7) 山本悦子「なりきり作文——モデル例と活用のヒント」、『国語教育』2013年2月号、明治図書。
- (8) 日本国語教育学会『国語教育総合事典』朝倉書店、2011年、327頁。また、青木幹勇の書籍から、想像力を養うために、教室の窓際になっている「ヘチマとひょうたん」が見たこと、感じたこと、考えたことを「ヘチマとひょうたん」の立場になって書いてみようという学習を紹介している。さらに、視点を転じての作文は、主人公以外の人物の立場から場面を見ていくなど読みの指導においても行われていることが紹介されている。
- (9) 川崎、前掲書、95頁。その理由として、『『書く』ときには、我々は、ア）一語一語を吟味して選び、イ）それらを文法的に整えて並べ、ウ）伝達意図に沿った意味表現を構成しようと努め、エ）場面に適切な表現となっているか、その表現が他者にどのように受容されるのか、を慎重に計測する、からである。その計測意識が発動されているなかで『他者視点』は内面化され、自覚的に学習されるのである。』と述べている。
- (10) 山本、前掲書、13頁。
- (11) 『ひろがることば 小学国語 2上』教育出版、2016年、26頁。
- (12) 同書、26頁。
- (13) 森川正樹『クラス全員が喜んで書く日記指導』明治図書、2011年、24頁。
- (14) 有田和正解説・長谷博文著『6年生を追究する子に育てる』明治図書、1995年、52頁。「例えば、『大仏を作っているこの人たち、どんなことを考えながら働いているのでしょうか。その人になったつもりで、吹き出しに書いてごらん。』などというときに、このなりきり日記が生きる」と例を挙げている。
- (15) 大恵信昭「歴史人物なりきり作文——ひと工夫するヒント」、『社会科教育』2012年7月号、明治図書、84頁。
- (16) 関誠「荘園の授業」、歴史教育者協議会『歴史の授業は子どもが主役 歴史地理教育852号』2016年、84頁～89頁。この号に、小林朗「中学生が原始人日記を書く」という実践報告も掲載されている。
- (17) 生徒が書いた作品は、注(16)の前掲書には掲載されていないが、歴史教育者協議会のHP (<https://www.rekkyo.org/archives/2129>) 上にPDF (<https://www.rekkyo.org/wordpress/wp-content/uploads/2016/07/81259ee1476a625a6319fc04da8e0f82.pdf>) として掲載されているためそちらを参照した。
- (18) 関、前掲書、89頁。
- (19) 西本匡志「話し合い活動を通して、子どもが生き生きと活動する歴史学習——『なりきり歴史学習カード』を活用した実践から」、愛知県教育委員会『愛知県教育研究論文集（第43回教育研究論文）』愛知県教育振興会、2010年、17頁～25頁。個人研究の部、優秀論文となっており、

選評は、次のように書かれている。「歴史は暗記が中心となるという児童の先入観を吹き払い、主体的に考える学習態度を身に付けさせる手立てを工夫したものである。『なりきり歴史カード』などによって、児童の思考が深まる様子がよく伝わってくる論文である。」(5頁)

- (20) 同書、17頁。
- (21) 同書、22頁。
- (22) 同書、24頁。
- (23) 同書、24頁。
- (24) アンディ・アラシェフスカ著、川浦康至・田中敦訳『日記とは何か 質的研究への応用』誠信書房、2011年、3頁。
- (25) 同書、3頁。
- (26) 川崎、前掲書が述べる「自己視点の自覚化・相対化」まで生徒が意識しているとは考えにくいですが、表出した文章は生徒の生活感(観)や思いが含まれているとは言えないだろうか。
- (27) 小林、前掲書、26頁において、小林は「思い切って自己表現をしてもしっかりと受け止めてくれる集団に自分が所属していることが、いかに自分の生を充実したものにし、幸せを実感することができるのかを生徒はこの授業で体験した。」と述べている。生徒のどんな表現の表出も大切に受け止めることを、生徒とともに体現しようとしているのであろう。

(受理日 2018年8月16日)